俳人 成田千空研究会

千空研究

第2号

千空さんの書斎

成田書店は、千空さんの書斎でもあった。いつも店の片隅で仕事をしていたから、本が雑然と積みあげられていた。本を買おうとしたお客が、「それは売り物じゃない。おれの本だ」と、怒られたという話が伝わっている。

ここで原稿を書いたり、『萬緑』や「読売俳壇」の選句をしていた。後ろに掛けているのは師・中村草田男が訪れたときに書いてくれた短冊「掌篇的な店へ絵葉ひ夏の蝶」である。

本を買う客は多くないが、遊びに来る客がひっきりなしだった。俳句仲間はもちろん、俳句をやらない町の人も千空さんが好きで来ていた。日中は仕事にならないので、朝起きると4時だろうが5時だろうが、家から自転車でやって来て仕事をしていた。市子夫人が店へ出るとき、自宅から朝食を運んでくるのである。

この一隅は、ふかうら文学館、「千空の間」に再現されているので、実感することができる。

—ふかうら文学館—

炎熱の千空窟といひつべし

（十方吟）

目次

千空さんの書斎 1

千空さんとの出会い・津軽詩話会のこと
—佐々木榮造さんに聞く— 2

〈回想の成田千空〉

思い出すままに…… 木村武彦 3

千空さんの言葉「バガになれへ」 浅利康衛 4

絵画のあり方を学ぶ 田中和弘 5

歳時記に採られた千空句①『合本俳句歳時記』 4

〈千空点描〉 自転車 5

〈戦後俳句作家シリーズ〉

『成田千空集』解説 徳才子青良 6

〈作品鑑賞を読む〉①

妻の眉目春の竈は火を得たり 7

父・米田一穂と千空 米田省三 8

青森萬緑会通信句会誌『未来』を中心として(1)

千空俳句の礎(1) 西谷ともえ 9

永住の地五所川原 成田千空をめぐる人々(1)

忘れがたき五所川原人 増田木亘子 齋藤美穂 10

〈成田千空資料再録〉② 13

寄贈感謝・会員名簿・北極星 16

千空研究会の事業

①詳細な年譜の作成
②千空俳句データベースの作成
③関係資料の収集
④関係者からの聞き取り
⑤会報『千空研究』の発行
⑥『評伝 成田千空』の刊行

千空さんとの出会い
津軽詩話会のこと

―佐々木榮造さんに聞く―

かつて五所川原に「津軽詩話会」という団体があった。千空さんは『俳句は歓びの文学』で、次のように書いている。

昭和二十五年、飯詰村の帰農生活をやめて、隣町の五所川原に移り、小さな書店を開きました。……店の名を「暖鳥文庫」としました。……米屋の佐々木榮造（後の五所川原市長）が訪ねてきて、詩と短歌と俳句の会をつくろうということになり、町中から二十人ほど集めて「津軽詩話会」が発足しました。会員はそれぞれのジャンルの作品を持ち寄って、公民館で合評会を行うばかりではなく、俳人が詩や短歌を試み、詩人が俳句を試みるなど、相互に学んで町の新聞を機関誌代りに使いました。戦後の文化活動という意識がありましたが、合評会では時々ケンカになり、三年間ほどで活動が終わりました。昭和二十七年に若山牧水の歌碑を建立したことが今に残る活動の足跡となりました。

佐々木榮造さんを訪ねて、お話を聞いた。

――津軽詩話会が出来たのは。

昭和26年です。戦後で（2回の大火で）焼け跡だったでしょ。まったくの焼け野原ですよ。青年たちは、なんとしても郷土を復興しなければならないという機運にあったわけです。その焼け野原にすごいエネルギーが充満していたわけです。五川原に文化団体が20ぐらいできました。津軽詩話会は、短歌と詩と俳句で纏めようとしたわけです。千空さんが俳句、柴野宇一郎さんが短歌、柴野さんは和田山蘭に弟子入りした歌人ですからりっぱなものです。それに詩を私が担当することになりました。

とくに代表は決めないで、3人で協議しました。自然に事務局を私がやるような形になりました。当時は公共の会場は公民館しかなかったものですから、たいていの集まりはお寺や個人宅でやっていました。

私は青年団長だったので、公民館の運営委員でした。公民館主事は葛西国四郎さんで、私の恩師だったものですから、よくしてもらいました。

例会は（公民館で）5、6回、あるいは7、8回やったかもしれません。それには20何人か集まりました。短歌とか、俳句とか、詩を、ジャンルを問わずみんなでやるんです。

会報も私が作りました。まだ紙も不自由な時代でしたので、知合いの藤田書店に頼んで西洋紙を分けてもらい、ガリ版で刷りました。五所川原の家に行けば、2号か3号、残っているはずです。

――その後、津軽詩話会はどうなりましたか。

街が復興するにつれて、事情も変わりました。それぞれが分れて活動するようになりました。千空さんは、五所川原俳句会の代表になりましたし、柴野さんは五所川原短歌会で活動するようになります。私は青年団活動から政治に入り文学活動の時間がとれなくなりました。しかし、千空さんとの友情はずっと続きました。

――千空さんとはどんな出会いでしたか。

わたしが満州から結核になって帰ってきて、平山家の山林の管理を任されました。山に通っていて、それで病気が治ったんです。

千空さんも結核になって飯詰に来て、開拓をしていたんですよ。飯詰には満州引揚者の興隆開拓団がありましたが、それとは別に、地元の開拓地もありました。そこに通う千空さんと、山に通う私が、いつも出会うんですよ。誰だろう、どこから来たのだろう、と気になるわけです。向うもそう思っていたようです。

平山家の山小屋、茅で作った小屋があるんですよ。そこが私の居場所です。ある日、私が留守のときに来たようで、貼り紙があったんです。もう忘れましたが俳句だったように思います。「何者が来た、誰を待つのか」というようなことが書いてあったと思います。それで私が返歌を書いて、大きな松の木に貼っておきました。その出会いが、後に津軽詩話会に発展するわけです。

――それがお二人の生涯の友情になるんですね。

千空さんは「これは、遠城（佐々木榮造のペンネーム）が書いたんだ」と、その貼り紙を持っていましたよ。彼が亡くなるまで交際が続くわけですが、その山小屋での、貼り紙による出会いが一番心に残っています。

――貴重なお話をありがとうございました。

＊なお、『文芸あおもり』第161号には、「若山牧水と五所川原―佐々木榮造さんに聞く」がある。

回想の成田千空

思い出すままに……

木村武彦

旧制木造中学校三年生の頃、
「この本読んで見ねが？」と、本の好きな私に声を掛けてくれたのは、五所川原町本町の老舗呉服屋の同級生、佐々木達夫君であった。彼はとてもセンスのよい川柳を作り、私に見せてくれた。
千空先生のやっていた貸本屋に連れて行ってくれたのも彼であった。汽車通学をしていた私は五所川原で途中下車し、本を借りるため千空先生の店へ佐々木君と行っていた。先生は立派な俳人だと聞いていたので、失礼なことは言えないと思い、緊張していたことが思い出される。
昭和二十年、画家の竹浪謹爾先生が「北画会」を立ち上げ、私も参加した。展覧会を開催したいと思っても、五所川原町は二度にわたる大火の後だったので、なかなか会場が見つからなかった。ようやく大町の老舗和菓子屋「三好庵」の二階が、夜はダンスホールとして使われているが昼は空いているというので、使わせてもらうことになった。
千空先生と初めてお話が出来るようになったのは、北画会の展覧会の時からである。先生は私たちの絵を丁寧に見て下さり、絵から受けた感想を話してくれた。そして、私に、
「君が絵を描いているのを初めて知ったよ。これから時々、店に寄って行けばいいよ」と言ってくれた。
会場の私の絵をひとつひとつ、丁寧に見てくれ、いろいろ話してくれた言葉は、私の胸にひとつひとつ浸みこんでいくようで感激した。
私には、四人の素晴らしい恩師とも言うべき人たちがいる。絵の師匠である竹浪謹爾先生、詩人であり俳人でもあった船水清先生、陶芸家河合寛次郎氏の一番弟子といわれる高橋一智先生、そして成田千空先生である。
草や馬などを書いていた頃は、竹浪先生の絵の指導は勿論であるが、高橋先生、船水先生、千空先生からは、制作のための姿勢・心の勉強とも言うべきものを沢山学ばせていただいたような気がしている。
高橋先生から、
「絵を見せに来なさい」と言われ、お宅に伺った。先生は私の絵を壁に立てかけ、きちん正座し、長い間じっと見てくれ、その後、
「スピード感のある線がいいね。線の勉強をするなら日本画の友人がいるから」と、岡部陽先生への紹介状を書いてくれ、
「岡部先生の描く線を見せて貰えばいいよ」と、電話まで掛けてくれた。
千空先生には時々、油絵やスケッチなどを見てもらっていた。絵を見る時の真剣な眼差し、私の作品を、先生お気に入りの机の上に静かにおいて、じっと見てくださり、気付いたことを丁寧に言ってくれたものだった。
千空先生は、
「家で仕事をするより店の方が落ち着いて仕事が出来るよ」と言っていた。私も、
「ゴジャゴジャしているアトリエの方が落ち着く」と言ったら、
「そうだね」と、大笑いしたことを思い出す。
五所川原へ行くと、増田病院の歩道から先生の店の方を見て、書き物をしているときはそっと帰り、お茶を飲んでいる時に寄ってくる。先生が忙しい時は邪魔しないというのが私のルールだった。
平成十九年十一月十七日、突然の訃報に頭が真っ白になった。
「千空先生が亡くなられた……まさか……」
十一月十二日に、妻と二人で増田病院へお見舞いに伺ったのだった。その日は暴風雨で荒れた天気だったが、先生は顔色もよく、お元気な様子に安心して帰った。帰り際に、
「また来ます」と握手した。妻は力強い握手だったと喜んでいたのに……。その日は、先生が必ず見に来て下さっていた「北画会展」の会期中だった。
私がスケッチする時は、厚手のケント紙にペンで一発勝負で描き、消すことができない真剣な気持ちで勉強していた事を、一番判って下さっていた先生だった。
先生が私に遺してくださった、次の言葉を大きな宝物として、また、心の支えにして生きていきたいと思っている。
・器用に綺麗に描こうとしないのがいい。
・線だけで、的確な表現が出来るのは練習だけではない。物に対する思いが表現に繋がるのではないか。
・線にスピード感があっていい。
・デッサンがしっかりしているので、スケッチがもう作品になっている。

今も先生の店があった前を通るとき、自然に顔が店の方を向いてしまいます。顔を上げてにこにこ笑っている先生がそこに居られるような気がしている。

春になったらまた、深浦町の行合崎にある先生の句碑に会いに行こう。

行き合はん岬は草の花だたみ　千空

（画家／板柳町）

千空さんの言葉

――「バガになれへ」――

浅利康衛

この度「東奥文芸叢書」の句数三百六十句を出すようにと言われて、少年時代から七十歳台まで書き殴りのノートに残っているものの中から拾ってみたが、よそ様に見ていただける作品はほんの少しだけしか無かった。

そこで、昔私が第一句集『溶明』を上梓した（昭和57）頃、千空さんに言われた言葉を思い出した。

「康衛さん、バガになれへ」

今八十三歳にしてバガになれなかった自分をつくづく思い見るのである。小学教師がバガになったらどうする、正当な教育が出来なくなるではないか、というのは体のいい私の逃げの姿勢に過ぎなかった。

反逆の主張とはいいかえれば批評精神であろう。俳句をあき足らずとした年少のころから彼の内部に芽生えていた精神で、今、彼は自分の句業を推し進める動力として使っているようだ。営為から当為への探求が彼における句作の理由であろう。最近、風土奥深く参入して古代感愛の句をつくっているのも、現代のあそびに対する反逆のあらわれかもしれない。

（句集『溶明』の跋より）

今から三十四年前の、千空さんのこの跋文がバガになれという励ましであり期待であったと思われる。「営為から当為への探求」は、その意味で私は今も続けているのである。

また、千空さんはある俳句大会の席上で、「俳句はどう作ってもよい。確かな手応えさえあれば」とも言われた。これは最大公約数的にまとめた言い方であろうと思われる。確かな手応えとは何か。一句としての存在感。――何が存在感かは、個人としてはそれぞれ違っているだろう。千空さんの言う存在感とは。

これは本人の口から聞くことはなかったが千空さんの師草田男の求めた俳句よりはわかり易いと思われる。草田男の求めた世界は、

「思想性・社会性とでも命名すべき、本来散文的な要素と純粋な詩的要素とが、第三存在の誕生の方向に向かって、こゝにあひもたれつゝ流動してゐるに相違ない」――若し「一元化」への道と「第三存在」への道に、私がいく分でも、より肉迫しつゝあるのであつたら、こんな嬉しいことはない。

（昭和11『母郷行』）

と述べているように、それは「第三存在の俳句」である。詳細は避けるが、それはアテネパルテノン神殿の馬の頚部のようなものだという。これを「原馬（ウルフェルト）」とよんでいるという。これは如何なる現実界の馬より馬らしい馬なのだと。

更に、草田男がここで言っている「一元化」について付言しておこう。それは思想性・社会性という要素と詩的要素という二つの要素の一元化のことを指している。その一元化された俳句のことを「第三存在の俳句」と呼んでいるのである。

「草田男のことは全部私の中にある！」と、自分の脇腹をポンと叩いて、私に言ったことがある。従って千空さんは、この草田男の「第三存在の俳

【歳時記に採られた千空句】①

合本俳句歳時記　新版

春

春暁　＊ねむる子に北の春暁すみれ色
渡り漁夫　雲充ちて荷ぐるみ黒く渡る漁夫
雪割り　雪割るとほのめくみどり鳩の胸
馬耕　馬耕追ふひとり草木に風の渦
風車　風ぐるま光りを紡ぎ廻る子よ
蜷　蜷の歩み男を叱る女の声

夏

雹　雹打つて奇しく明るく並ぶ墓
青田　大粒の雨降る青田母のくに
玫瑰　玫瑰や波をなだむる砂の隈

秋

新藁　焚き添へてふくらむ藁火遠い母
瓢　病よき妻ゆゑ眩し青瓢
晩稲　晩稲扱く心胆あつき老ならむ

冬

藁仕事　いちまいの蓆にすぎぬ蓆織る
鱈　老の赭顔子等の紅顔鱈船来る

新年

去年今年　去年今年一と擦りに噴くマッチの火

＊は別版。

合本　俳句歳時記　新版
1985年5月20日　21版発行／編者　角川書店
／発行者　角川春樹／A6判、上製、1165ページ。

句」への道は十分理解した上で己の俳句をそこに重ねているものと思うのである。

草田男の言う思想性・社会性と詩的要素という二つの要素を、千空さんは、「地域の人々の暮らし」の中に求めた。

大粒の雨降る青田母の故郷　　千空

そういう意味でこの句は、千空俳句のふるさととでも言うべき作品であろう。大自然の営みと、そこに生きる人々の命との「讃歌」である。

昭和26年、草田男が青森へ来た時、十和田湖方面へ吟行、千空さんはその時作った作品を全部捨てた、と私に語った。その理由は言わなかったが、おそらく草田男の作句および作句態度を目の当たりに見てのことであろう。新岡青草さんの話によれば、草田男は一定の場所から離れなくなって「苦吟」していたという。時間が気にならなくなったのである。一方、千空さんは「草田男よりいい句を作る」と意気込んでいたという。千空二十九歳。そして「全部捨てた」という第一句集『地霊』刊行が昭和五十一年五十五歳。十和田湖方面吟行の草田男一行のほんの一断片の様子だが、草田男、千空の作家としての特徴をよく知ることができる。

この頃、私に俳句を教えてくれた青草さんの句、

浜通り一丁目千鳥鳴いて来つ　　青草

を、千空さんは「あそびの句」として捨て去ったのを覚えている。私はこういう青草さんの境地にも捨て難い魅力を感じているのだが、若し千空さんが生きていたら、五十年前の、つまり三十代の時と同じようにこの句を捨てるだろうか。「全部捨てた」十和田湖吟行の作品を見てみたい。

（俳誌『まほろば』編集発行人／青森市）

絵画のあり方を学ぶ

田中和弘

昭和二十二年ごろ、上野で泰西名画展を見る機会があり、後期印象派の作品に触れ、胸が高鳴ったことが思い出される。特にゴッホの作品には感銘を受けた。

後日、式場隆三郎の『炎の画家ゴッホ』を読み、私は絵の世界に入った。

当時、五所川原には画家不在で、向かいに住む俳人の平山五朗と芸術論を交わしていた。彼の紹介で暖鳥文庫を訪れるようになった。

千空は平山五朗の作品を見るついでに、私の絵も見てくれた。それから、成田千空の元へ通うことになる。

あるとき、千空から句会に参加するよう勧められて、初めて句を創ってみた。

泥濘の中に吾が顔見ゆ月夜

とやったら、「デモーニッシュなものがある」と、すごく賞められた記憶がある。彼はレベルなどではなく、本質的なものをズバリ言ってくれる人だった。

青森市で育った彼だから、小学生のころから絵画展に顔を出しており、豊富な識見をもっていた。もちろん、当時名だたる浜田英一とは語り合うこともあったようだ。また竹浪謹爾は、暖鳥文庫にちょくちょくお邪魔している。

彼は自分の築いた俳句の世界を通して絵画を見ており、その視点で絵画の世界を構築しているのだ。やはり俳人として高い境地にある人だ。エスプリの世界に妥協は許されない。深い境地ながら平易な話し方だったので、みんなに良く理解された。彼の人柄がにじむ話に、つい長居してしまうことが多かった。

私は、彼から作品の浄化、深化、広がり、風土性など限りなく学んだ。暖鳥文庫の店には石沢修一の油絵・デッサンなどの小品が飾られていたのが眼に浮かぶ。

（画家／五所川原市）

【千空点描】

自転車

千空さんは、運搬用の自転車を愛用していた。これで本の仕入れや配達をしたり、自宅から書店への通勤にも使っていた。成田書店の前に、いつも自転車を置いていた。自転車がなければ、千空さんが出かけていると分かる。

吟行にも自転車を使っていたようで、県文芸協会の35周年記念会では、「自転車と俳句」という講演をしたほどの、自転車好きである。

だが、失敗もある。雪の降る夜、千空さんを囲んで文学談義をした。「酔ってるし凍ってすべるし、車で送るから」と、言っても、「明日の朝来るのに困るから」と、むりやり自転車を引いて帰った。

翌朝、書店を訪ねたら、顔を腫らした千空さんがいた。机には壊れた眼鏡も。　（佐）

生きざまの自転車一つ雪ざらし（十方吟）

戦後俳句作家シリーズ

『成田千空集』

解　説

徳才子　青良

十三の砂山
　米ならよかろナ
西の弁財衆にゃエー
　ただ積ましょう

十三でるときゃ
　涙ででてもナー
尾崎かわせば
　先いそぐ

（津軽民謡十三の砂山節）

茫々と生茂ったアシガヤ。津軽五所川原から北へ、二米余もあるアシガヤが十三潟まで延々とつづいている。冷たい北西風がアシガヤを吹き鳴らすと、この地方の長い冬がやってくる。アシガヤは竹のように固く、鋭い。いったんこれへ迷い込んだら、外の世界へでるのはなかなかむづかしい。その間に点在する水田は低湿地帯のために排水が悪く、別名乳切田とも呼ばれている。乳房まで水に浸かりながら田植えをするので、この地方の農家には嫁のきてもない。きても、冷え性から子宝に恵まれない女が多いという。また、この地方はサルケ地帯とも呼ばれ、農家では、サルケ（腐植土）を切りとって一年中乾かし、炉に燻して暖をとる。サルケを焚く農夫婦の目はいつも赤い。これが土地改良事業をやる十年前までの、岩木川ぞえにひろがる十三潟までの津軽の平野である。

成田千空を語るとき、津軽の風土を抜きにして語ることはできない。特に八百五十年昔日本七港のひとつとして栄えた冒頭の十三村の哀しい歴史を心で唄う成田千空の血の中には、低湿地帯にへばりついて凶作と斗いながら、なお十三潟を愛しつづけた先輩の血が脈うっているからである。

新墾田（あらきた）の青張り通し空生きる
行く向きに椋鳥来るひびき新墾地
蝶生る野は刈株と棘茨
雪原に土よりの杭うらがなし

敗戦後、成田千空は一介の開拓農として、五所川原の北、飯詰開拓地へ入植している。これはそのころの作品である。千空の世代は、戦争という巨大な歯車のなかで青春を失い、現実社会においても、三十六万九千方粁の狭隘な国となった日本の国土と経済を如何にして復興するか。また自分の生活をどのようにして建てなおすかという大きな責任が、両肩にかかっていた時代である。千空は自分の健康上のこともあったろうが土を選んでいる。そのころの開拓行政は食料増産を旗印に、土地の適不適など委細かまわず手あたり次第に入植させていた。一戸あたり僅かばかりの営農資金を貸付し、裸のままで山野に放りだしている。開拓者は、抜根から整地まですべて人力でやらねば方法がなかった。千空にとって、この開拓農五年の才月はもっとも起伏が大きく、千空の人生に、俳句に、貴重な才月であったと思う。

「敗戦によって、自分の風土が自分の中に息を吹き返したことをはっきり実感した。この実感がぼくの作品を一途に支えてきている。自分の風土が自分にとって掛けがえのないものと同様に、俳句もまたぼくにとって掛けがえのない詩であると言える。生きるということ、愛するということ、自分にとって掛けがえのないものは何かということは、論理以前の事柄であるにしても、ぼくにはまだまだ大事な問題である」（『現代俳句全集』第四巻）

という千空には、風土も俳句も、生きるために掛けがえのないものであると同時に、時には父となり母となっていたのである。

農の終焉壁を一重に干菜鳴る
喪の明や雪原を抽く葦の髄

俳句の世界には風土について詠う作家は数多く存在する。だが、この作品でわかるように千空は単なる風土を詠う作家ではない。戦後、「萬緑」に所属し、この世代の誰もが影響をうけた中村草田男の膝下で、草田男からうけついだ文学的土じょうを耕し、自分の血を詠うことによって、文学性豊かな作品としている。

鋤く土のはしくれせめぎあう谷や
露一と粒の光陰石を噛む根株
絶えぬ難民日の斑南瓜に灼けついて
雪の産屋蜜ひとさじの燈明るく

藻の水嵩人影村を出つづける

これらの作品は、昭和三十五年から四十年ごろまでに発表されたもので、千空の俳句に対する純粋なおもいをみることができる。昭和三十年前後から興った同世代の俳句の社会性、そして前衛運動に対しても極めて冷静であるといえる。新しいスタイルや詩的思考の流行を追うこともなく、風土の中で、一木一草に泪し、ひたすらに文学性を追求している。ところがこのような千空の文学に対する純粋性が、一部の若い世代から傍観者と見なされている面もないではない。このことについて、千空に素直に意見を求めたことがあった。「社会性というのは、何もビルやメーデーや、原爆忌をうたうことだけが社会性ではない。農村の人間が都会のことを詠うことよりも、私たちの住んでいる風土の中に、立派に社会性となるべきテーマがあるではないか。しかし私は、俳句をある目的のためにつくってはならないと思っている。」といったような答が返ってきている。

思うに、現代に生きる詩人として、内部に存在する現代の苦悩や矛盾や、社会的抵抗意識のために俳句をつくるのではなくて、それよりもっと深い生や死や愛のような人間存在の根本的命題を追求するとき、当然の結果として風土性のことも社会性のこともでてくるのである。千空は、俳句における社会性、風土性のことよりも、もっと高い次元の俳句の芸術性を真剣に考えているといってもいいであろう。それは次の作品からもうかがうことができる。

胃鏡(ガストロ)嚥むや夏日千古の隔りに
生路幽か枕のもとに蝶が舞う
病無頼合歓寝しづまる翳重ね
針攻めの幾夜経たるや月鬱金
桃一と口の甘露ベットを止り木に
桃馥郁病む辺も風の通りみち
穂絮映えいま神なしに眠り得る

千空は、昭和四十二年五月、金子兜太、堀葦男夫妻を、津軽半島十三村へ案内し、一行が秋田へ向った日、太宰治の出生地にある太宰碑の前で、突然血を吐いている。直後、胃にてきたポリープ摘出手術をうけたときの作品で、心の陰翳を極力押え、一見、死語とも思えるような古い言葉に新しい生命を賦与し、他に類をみない緊密な作品としている。

人間が人間を生み、草の種子が草を生む世界の中で、矮小な文学のために果てしない旅をつづける成田千空にも、素顔を見せない過去がある。それは、「萬緑」に全く作品を発表しない時期があった。このころは、俳句の前衛運動と時期を同じくしているので、千空の内部に、同世代のもつイデオロギーに対する葛藤があったのではないか。このことは、作品のうえからも、日ごろの会話の中からも、遂に覗見することはできなかったが。

だが、『生きるということ、愛するということ、自分にとって掛替えのないものは何かということは論理以前の事柄であるにしても、ぼくにはまだまだ大事な問題である』という文学理念から、千空の俳句に対する姿勢を知ることができ、作品のうえからは、いまなお、十三の砂山節を心から唄う延々と続く津軽のアシガヤを見ることができる。

（『海程』／青森市）

（戦後俳句作家シリーズ『成田千空句集』、昭和45年6月20日、「海程」戦後俳句の会発行）

＊執筆者の承諾を得て、転載しています。

【作品鑑賞を読む】①

妻の眉目(みめ)春の竈(かまど)は火を得たり

「萬緑」同門で、みすず書房社長の北野民夫は、同社刊『現代俳句全集』に千空作品を収録し、自ら「成田千空鑑賞」を書いている。（以下は抜粋）

＊

昭和二六年春の作品である。その夏、中村草田男は、千空その他の人々の招きで青森へ出向き「津軽」という群作をものしているが、その折、成田千空氏居にてと前書きして「掌篇的な店へ繪慕ひ春の蝶」という一句を作(な)している。草田男はこの時はじめて千空が新妻を迎えたことを知ったと何かに記していたが、その消息から推して、この句、表現面では単に妻となっているが、実は新婚ほやほやで、春の明るい竈火に映えて厨事にいそしむ新妻の横顔を、態度はさりげないが衷心から見惚れている千空の有様が眼に見えるようであり、生活にも新しい火を得た作者の愛恋の気息の籠ったリズミカルで軽快な句だ。同時に発表した句に「躑躅あかし赤き布干し妻すこやか」「妻の座の妻やきりきり筍剝く」などがある。

＊草田男句の下五、正しくは、夏の蝶。

父・米田一穂と千空

～青森萬緑会通信句会誌「未来」を中心として (1)～

米田省三

このたび、成田千空研究会から「千空研究」が発行されたことは喜びに堪えない。地方にありながら日本を代表する俳人として活動し、日本中の多くの俳人から目標にされていた千空の業績は、正しく顕彰し、受け継がれていかなければならないと常日頃から感じていたが、すばらしい企画であり、その主導者となった佐々木氏には敬意を表したい。

さて、早速本題に入るが、研究会から与えられたテーマは、「父米田一穂と千空」であったが、「青森萬緑会通信句会誌「未来」を中心として」という副題をつけて、「未来」にある記述を中心として述べてみたい。

そもそも、父一穂が「萬緑」に入会したのは、昭和二十九年のことであった。俳句には既に旧制中学校のころから親しんでおり、戦前は主に長谷川かな女の「水明」に所属して活動し、旧三本木町（現十和田市）に水明支部に当たる牧草吟社なるものを設立し、かな女を十和田湖に迎えて案内するなど、一定の評価を得るまでになっていた。しかし、昭和十六年に渡満、開拓の事業に当たるも終戦間際に応召、そのままソ連（当時）に抑留され、帰還後は甲地村（現東北町）巴蘭に、一緒に渡満した同士らとともに入植し、開拓地の小学校の校長として奉職、かたわら開墾作業にも従事した。その間、俳句を忘れたわけではなかったが、どうしても俳句を一義的なものとすることができず、いったんは俳句を中断しようとした。しかし、上北地域の俳句の同士に引き留められ、それならばと心機一転、「一番難しい「萬緑」へ入って、万年一句組で甘んじよう」（句集『起伏地帯』「あとがき」）と「萬緑」に入会したのであった。昭和二十九年と言えば、前年に、中村草田男が主宰する「萬緑」の第一回目の結社賞を千空が受賞し、全国の注目を浴びつつあるときであった。「千空のようになれるものでなし、あの難解な草田男俳句には到底お前がついて行けるものではない」と父を揶揄する者もいたそうであるが、人間探求派草田男の俳句以外、自分を生かす道はないと考え、俳句の道に邁進するのであった。

千空の知遇を得るのは、『起伏地帯』の千空跋文によると、昭和三十二年前後と推測される。当時千空は県内の俳誌「暖鳥」の牽引者でもあったが、父もまた「暖鳥」に席を置き、昭和三十年には編集同人となり、会合等で会う機会もあったようである。また、一方で、青森萬緑会の通信句会誌「未来」が千空や川口爽郎の手で発行されており、これが、昭和三十一年四月に二十七集を出して以来、千空のところでしばらく頓挫していた。そういう中、昭和三十三年の「暖鳥」新年会の席で、父が千空に、是非やらせてくれと申し出た。実は、その前年の新年会のときにもそれに近い話をしたそうであるが、そのままになっていた。千空は深謀遠慮の人、発行遅延は、会誌がマンネリ化しないためにはどうしたらいいのか、その方策を熟慮していたのであった。一方父は、千空に言わせれば「善意の人」、言葉を換えればおせっかい焼きとでも言えようか、ともかく、仕事がら、事務仕事は手慣れているし、ガリ切り、謄写印刷はお手のものである。しかも、「鵞馬への鞭」（「未来」二十九集）に書いてあるが、この作業を通じて、自分という「鵞馬」に鞭を当てたい、すなわち多くの会員から刺激を受けて俳句の勉強をしたいという思いがあった。千空は、「目覚めのことば」（「未来」二十九集）というタイトルで、「米田氏の熱意を生かして、みんな協力すべきであると思った。とにかく会報を再刊しなければならぬ」と、父に任せてなんとか再刊したいという思いを述べている。その際、編集方針は今までの方法を踏襲し、「みんなの意欲を覚まし、だんだんやり方を新しくしてゆくしかない。そのためには会員が毎月欠かさずに作品を出し、批評する。批評はきびしいほどよろしい」。父が「未来」を引き受け第二十九集（二十八集は三十一年五月に募った作品の結果を二十九集に掲載という形をとる）を発行したのは昭和三十三年二月、二十七集からは実に二年近くかかっていた。二十九集の表紙は謄写印刷ながらカラーで、表紙絵は土筆を一穂が描いている。内容は、先に述べた千空の巻頭言「目覚めのことば」、続いて、第二十九集互選結果発表、三十集互選句

米田一穂（まいた かずほ）

明治43年三本木町（現十和田市）生まれ。15歳で旧派宗匠互扇楼桜曙に入門。昭和5年長谷川かな女に師事「水明」入会。昭和29年「萬緑」に入会、中村草田男に師事。萬緑同人、俳人協会評議員。平成6年、84歳で没。

句集・『起伏地帯』『雉子の綺羅』『影と過去』、『米田一穂全句集』。賞・萬緑賞、角川俳句賞、県文化賞。

草稿、二十八集雑詠収録、二十九集出句者名簿。後書きとして一穂の「鵞馬への鞭」と続く。ちなみに、二十九集出句者は二十名で、県南からの出句者が増加していた。この「未来」の引き継ぎにより、千空と一穂の距離はぐんと近くなり、明治四十三年生まれの一穂が、大正十年生まれの千空を畏兄としてその作句態度等を学ぶことになるのである。

（十和田市／俳文学会会員）

千空俳句の礎 (1)

西谷　ともえ

私は千空さんにお会いしたことは一度もない。こんな私が青森県近代文学館に赴任し、企画展「成田千空」の展示を担当することになり、テキストにしたのが『俳句は歓びの文学』（角川学芸出版）である。千空さんのエッセイ集であるこの本からは、千空さんの生い立ちから俳句へ向かうまで、また俳句の世界に入ってからどんなことを考えてきたのかが手に取るようにわかる。俳句の解釈については諸先輩方にお願いするとして、私は千空さんのエッセイに書かれた事柄を中心に、当時の状況や背景などを資料で裏付ける作業をすすめようと思う。

『俳句は歓びの文学』によると、東京の軍需工場に勤務していた千空さんは、肺を病み昭和十六年帰郷する。その頃姉の岡田寿美栄に勧められ俳句をはじめ、高松玉麗主宰の「松濤社」に入社した。寿美栄は飯詰村（現五所川原市飯詰）にある母の実家の跡継ぎ、岡田晴秋に嫁いだ。晴秋は青森の「松濤社」と、札幌の青木郭公主宰「暁雲」の同人で、自分でも「暁風」という俳誌を出していたが、昭和九年二十八歳で亡くなったという。千空さんは松濤社で一年ほど活動したが、主宰の玉麗と、幹事で、自宅を句会に提供していた吹田孤蓬が仲違いをして、別の道を歩み始めたときに松濤社を離れ、しばらくは方言詩や小説を書いていたが、

岡田晴秋の句碑（齋藤美穂撮影）

昭和十八年、孤蓬からの誘いで青森俳句会に参加するようになったという。

はじめに、高松玉麗について簡単に書いておく。玉麗（本名は喜久蔵）は明治三十六年青森市大字造道字浪打の商家に生まれ、橋本小学校から青森市立商業学校へ進学。卒業後、青森市米町の商店に勤務する傍ら、小学校時代の友人である淡谷しづく（大正九年に善知鳥吟社を創立）から手ほどきを受け作句を開始した。大正十二年から家業に就き、「東奥日報」の俳句欄に投稿を重ねた。大正十三年、福士松濤、大坂祇蕉を顧問、木村横斜を正選者として招き、松濤社を創立した。郷土俳句を提唱した松濤社は、合同句集第一輯の『おぼろ』をはじめ、昭和四年までに五冊の句集を刊行し、昭和五年には「寂光」第一号を発行した。「寂光」は平成六年の終刊まで五九二号を発行し、本県を代表する俳誌となった。また同じく昭和五年に「青森県句集」の編集刊行を開始した。戦中戦後に休止した時期はあったものの、平成元年まで五十集を数え、これも青森県の俳句史上欠かせないシリーズとなった。

戦前の「寂光」は青森県近代文学館にも所蔵が少なく、また所蔵していても、原本ではなくコピーのみの号も少なくないため、なかなかその全貌を知るのは難しいが、千空さんが所属していたと思われる昭和十六年から十八年の号は、七冊確認できた。そのうち十七年第五号を除く全ての号に千空さんの句を見つけることができた。「成田千空資料再録②」（本紙13ページ）にそれらを掲載している。昭和十六年の十二月以前の号の所蔵がないので、千空さんが会員となって句を作り始めたのがいつなのかはわからない。「月刊東奥」（太田耳動子選）を見ると、昭和十六年四月十一日発行の号ではじめて入選し誌面に登場している。この投句欄は前月二十日〆切で翌月十日頃発行号に掲載となることから、おそらく「寂光」三月号あたりから句が見えるのではないかと想像出来る。現在、その頃の号を所蔵している方がいないか捜索中である。

千空さんから少し脱線するが、姉の亡夫、岡田晴秋について少し書いておきたい。『俳句は歓びの文学』によると、千空さんは肺を患い帰郷した

頃や、五所川原で帰農生活を送ったときに晴秋の蔵書を耽読し、その影響を受けたという。晴秋（本名は晴一）は「寂光」創刊前年の昭和四年からの同人であったことが、「青森県句集」第一輯掲載の「松濤社年譜」からわかる。「寂光」創刊号に三句掲載されており、途中掲載されていない号や、確認の取れない号もあるものの、昭和九年までに句がいくつも掲載されており、昭和十年一月号に訃報が掲載されている。また、「青森県句集」第一輯の「序文にかえて」で青木郭公は、自身が青森県の俳壇と親密な仲になっている理由として「寂光」の選者になっていることに加え、「飯詰の岡田晴秋氏等が発行してゐる俳誌『暁風』にも関係を結」んでいることを挙げている。千空さんは『俳句は歓びの文学』で「まったく無名の俳人ですが、私にとっては大事な人」と謙遜しているが青森県俳壇にはなくてはならない一人だったと言って良いだろう。現在五所川原市飯詰の岡田家の墓には、千空さん揮毫の晴秋句碑が建てられている。

「青森県句集」に戦前の千空さんの句を確認することは出来なかった。「青森県句集」は昭和五年創刊後、第九輯までは毎年刊行されたが、第十輯を一年遅れの昭和十五年に刊行、次の第十一輯は戦後昭和二十二年の刊行となった。千空さんが松濤社に所属していた頃は丁度休刊の時期に当たる。そのため千空さんの登場は昭和二十六年刊行の第十三輯で、既に「暖鳥」や「萬緑」で活躍の頃である。第十一輯は、五十名ほどの掲載であったのが、第十二輯からは増田手古奈をはじめ八十名ほどの句が見えはじめ第十三輯では「十和田」「辛夷花」「暖鳥」「十川」「蛾虫」「如月」「芦光」「玫瑰」など、県各地の様々な結社から一四〇人の俳句が掲載されるようになったのである。後に「暖鳥」の主宰となる新谷ひろしや当時「暖鳥」に活躍の舞台を求めていた青森高校一年の京武久美らも初登場となった。（青森県近代文学館主幹／青森市）

―永住の地五所川原　成田千空をめぐる人々(1)―

忘れがたき五所川原人　増田木亘子

齋藤美穂

敗戦からの出発

《敗けたりと思ふや代田泥深く　千空

昭和二十年八月十五日、天皇の玉音放送があり、日本はついに無条件降伏したことを知りました。放送を聞いて、いつまでも泣いている姉を離れ、私は野道を歩き廻りました。敗戦の口惜しさと共に、戦争が終わった安堵感が湧いてきました。日本はこれからどうなるかわからないが、とにかく生きなければならない》

（成田千空著『俳句は歓びの文学』）

千空さんが出生地の青森市から母の故郷である北津軽郡飯詰村（現五所川原市）に移住したのは昭和二十一年、二十五歳でした。前年の青森空襲で見た〝この世の地獄〟、それから間もなく迎えた敗戦。その口惜しさと終戦の安堵感。困難な生活の中にも精神の自由を見出し、それぞれの新たな生き方を模索しなければならなかった人々の中に千空さんもいました。昭和十八年から千空さんも参加していた青森俳句会では、二十一年二月に俳句雑誌「暖鳥」を創刊、〝日本の文化再建を担う〟という自覚をもって始動した会員たちの意気込みを伝えています。その中で千空さんは《今年は大いに畑をつくる積りで居ります。働いて〳〵流れ出るその汗の中から何とか眞の自分の句を生みたいと念じてゐる》との所感を寄せています。

植ゑあげしじゃがたら畑青い月

百千鳥ききと百姓無表情

二十代あはれ蜻蛉（あきつ）の縞濃ゆし

（以上昭和二十一年作）

永住の地となる五所川原での生活は、敗戦からすべてを見つめ直し、汗して立ち上がる日々に始まったのです。

五所川原に文化活動を

昭和二、三〇年代、戦後の混乱や二度にわたる大火、また天災に見舞われながらも力強く復興しようという活気に満ちていた五所川原。新興の町として商店、旅館、割烹、劇場、新聞社等々が立ち並び、現在からは想像できないような活況を呈していた商都・五所川原ですが、開拓の歴史が浅く、文化的な土壌が育たない土地柄だと言われていたようです。そのような状況の中、文化面での復興をはかろうとした人々がいたことは興味深いものがあります。彼等はどこかで引かれ合い、つながりを持つようになり成果を残しました。今回は増田木亘子（もくかんし）と若き日の成田千空についてお話します。

五所川原市新町にある増田病院の元院長・増田桓一（一九〇九～一九九七）は、祖父の代から続く医業の伝統と研究成果で、西北五地方で信頼を集めた名医として知られています。東北帝大医学部

を卒業し国立傷痍軍人宮城療養所医務課長を務めていましたが、父貢が病気のため昭和十九年に五所川原へ帰り、昭和二十二年に増田病院院長に就任しました。

当時を知る人々が「先生の前に座るだけで病気が治るような気がした」「まんず、かみさまと同じだ」と話すようすからは、どれほど敬愛されたお医者様であったのだろうと想像されます。平成七年には五所川原市の名誉市民の称号を贈られています。

私は、平成二十六年に開催された青森県近代文学館の「成田千空展」の関連から、増田先生が医業とは別の顔を持っておられたことを知りました。芸術を愛し、地域の文化の発展に関わった人々が身近に存在することに大変興味を持ちました。町の人々に慕われた増田先生は、木亘子という雅号をもつ俳人でもありました。戦後、一戸馬寒、白戸石路等と自由律俳句誌「山河」を創刊し、荻原井泉水（おぎわらせいせんすい）を五所川原に招いています。本業で多忙な中、後に五所川原俳句会や「暖鳥」同人として句作を再開し、県下俳句大会の選者として名を連ねてもいます。また五所川原の文化活動を全面的に支援する文化人として、五所川原出身の洋画家・伊藤正規等と洋画会結成、牧水碑の建立、芸術鑑賞協会の設立等々にも尽力しました。

井泉水は無季自由律の俳人として知られています。かねてより関心のあった井泉水を招いた俳句会に出席した千空さんは、自由律俳句の発生には津軽が関わっていることなどを直接に聞き及んだのでした。千空さんのエッセイでは昭和二十一年五月とありますが、そこで増田木亘子と出会ったという記述は今のところ確認していません。しかし、千空さんが早くから文化人としての木亘子に注目し、また医師としての生き方に惹かれ影響を受けていたことは次のエピソードから知ることができます。

日々の食料のための帰農生活で精一杯の千空さんは、毎月送られてくる青森俳句会の会誌「暖鳥」を町の本屋で置いてもらおうと、飯詰から町まで四キロの道を歩きました。すると町の病院の板塀に、句会の入選句が貼り出されているのを時折見かけたというのです。それは、医業のかたわら町の文化発展を後押ししようという木亘子こと増田先生の行為でした。千空さんはそれを見て、著書『俳句は歓びの文学』の中で次のように記しています。

《町の中にそこだけがぽっと明るみがさしている感じで、白い大型の紙に句が書き並べられ、赤い薔薇の花が書き添えられていました。句会の句を町民に公開する行為の明るさに感心したものです。

「山河」の二号に木亘子はこう書いています。

「――威武も屈する能わず、富貴も淫する能わざる在り方こそ次代人類文化の必然の姿でなければならない。世界史の必然の方向を先取し、西洋と東洋の二つの民族的性格の特長を体認するものである限り、吾々は領土の狭小も武力の解除も、嘆く必要はない。日本は道義の大国として生きよう」。俳句仲間のささやかな雑誌に、こういう大きな命題を展開し吐露する壮年期の木亘子の面目に、私はひそかに惹かれるものがありました。〈大きな牛の耳が動いて蚊が生れていた〉〈死んでゆく人にうそついて青空〉〈ひかりふる木蓮にただ白くたかく〉。彼の自由律俳句です》

一方、帰農生活の中、千空青年は文学への熱い想いをたぎらせていきました。肺病の療養をしながら、いかに生きるべきかと毎日本を読み、原稿用紙二、三枚ほどの日記を書いていました。そこには音楽会や講演会にも出かけるなど幅広く見聞を広める一方で、時代や病に耐えて自問し続ける青年の姿があります。青森の句会では専ら聞き役であった千空さんは時に激しく感情を綴っています。昭和二十二年の日記（五月二十二日付）には、十三年ぶりに開催される県下俳句大会を控えて〝新人会結成〟を成し遂げようとする千空さんの計画が記されています。応募句数四千句であったという県下俳句大会は、県俳壇の復興の証と思われましたが、死病と闘いながら俳句を探求していた千空さんにとっては納得のいくレベルとはいかなかったようでした。やはり俳句の精進は己一人でするべきかとジレンマに陥った様子が伺えるだけに、木亘子のような明るく大いなる意思には惹かれるものがあったのではないでしょうか。

青森でよき仲間から刺激をうけて過ごした千空さんは、木亘子と同様に地域の文化向上の必要性を理解する人であったろうと思います。飯詰の村から出て五所川原で文化人の社交場のような書店を開きたい、自由な俳句会を作りたい――つましい生活の中でも高い理想を掲げる若き千空さんの姿が浮かんできます。市子夫人からお話を伺うと、結婚当初であったか「五所川原にはなんと文化的なものが少ないのか」と言って板柳町出身の画家・竹浪謹爾の絵画展の開催に奔走したといいます。自ら絵筆をもつことを楽しんだ千空さんは、棟方志功が五所川原の平山家を訪れた際、どうし

てもひと目お会いしたいと関係者に頼んで御目通りを叶えたということもあったそうです。
　千空さんが増田先生を敬愛した理由やふたりの共通点も見えてくるようです。

風土を主題に

　昭和二十五年、千空さんは飯詰村の帰農生活をやめ、五所川原に小さな書店を開業します。その書店と増田病院は道を隔ててほぼ向かい側にありました。千空さんの商いは日銭を稼いで糊口をしのげればよしというもので、入院患者や子どもを相手に漫画本を貸したり、特定の患者さんに週刊誌を売る程度。最後まで出版社から販売のための本を取り寄せることはなかったといいます。町に出て念願の書店を開業したことで、千空さんは孤独から解放され、自由な時間も得られるようになりました。
　中央の俳人を知り、交流を持つようになってからも五所川原を離れなかった千空さんですが、ここでも増田先生の生き様に千空さんは共感していることがわかります。ふたたび前掲の著書より引用いたします。
《私が木亘子に注目したもう一つの理由は、シビ・ガッチャギという津軽の風土病に取り組んで、病院に特別な研究棟を設け、弘前の大学病院とも提携して、研究に没頭していたことでした。二年後に解明され、ビタミンBの不足ということがわかりました。津軽の農民の貧しい食生活が原因で、眼や肛門が爛れる病気、それがシビ・ガッチャギで、遠い昔から解明されないままにきた風土病なのでした。田舎の町医者には稀な、日本ビタミン学会賞に輝きました。風土というものが大きな主題になることを、私は増田博士から感受しました》
　木亘子と千空さん。共に縁があって五所川原に永住することになったおふたりが、地域の文化的な発展を願い、自らの命題を風土に求めたこと、そしてそれにも増して大きな人間的な魅力をもって独自の世界を創造した点に共通点を見出すことができます。
　五所川原俳句会で行動を共にする機会も増え、千空さんが病院内の俳句会へ出向くこともありました。昭和四十二年、増田木亘子句集『幼名』が五所川原俳句会より発行されます。千空さんはそのあとがき「人と作品」の中で、木亘子について「医学者であると共に芸術・宗教に心に寄せる情念の人、科学と科学以上の世界に早くから目覚めていた人」だと評し、次のように締めくくっています。
《作品を挙げてゆけばきりがないが、句集一巻を読みとおせば木亘子俳句の精神（エスプリ）が見えてくる。単に地方の風物を素材としたいわゆる風土俳句的発想を超えた人間木亘子独特の俳句の世界が見えてくるのである。
　木亘子さんが好んで用いる落款は「四媚我着」である。たいへん謙虚でしかも笑いに富んだ落款である。おそらくこの句集にも四媚我着の印を押したいところであろう。こういう諧謔味も木亘子さんの魅力の一要素であるが、さらに大きなまごころを私は木亘子さんの俳句に感じるのである》
　平成九年、増田木亘子の逝去を悼み寄せられた弔句の数々は、千空さんが全て筆でしたため、一冊の弔句集となって供えられました。

　師は在らず芒の穂波けむりいろ　成田千空

　木亘子の句集『幼名』やこの弔句に尽くされた千空さんの言葉からは、その生き様から感受したものの深さを知ることができるのではないでしょうか。

五所川原今昔

　幼名を呼ばれたような風花よ　　木亘子

　フルート奏者の増田多加さんは、国内外に向けて発売したファーストアルバムのデザインに祖父・増田木亘子の俳句を取り入れています。そしてそのことについて次のように説明してくださっています。
《今までほとんど読んだことのなかった祖父の句集『幼名』のこの句が、東北ゆかりの音楽も組み込んだCD「リンゴノハナ」のイメージのシンボルのようになればと直感的に思いました。今まで気が付かなかった俳句の魅力が色鮮やかに感じられ、素直に感動しました。文学館の「成田千空展」を拝見して、祖父が五所川原の文化振興に深く関わったことを知り、「この幼名の句を載せて良いんだ！」と確信を持つことができました》
　木亘子の俳句がジャンルを越えて放たれ、新たな感性で伝えられようとすることに、私は感銘を受け、忘れられない出来事になりました。
　戦後復興を遂げて活気のあった五所川原の町の様子、そして文芸復興へ情熱を傾けた人々、千空さんにつながる五所川原の人々の存在を掘り起こしながら、成田千空という日本を代表する俳人の魅力を伝えたい、それが今を生きる私たちにつながるものであれば、なお喜ばしいことと考えています。

（千空研究会調査研究員／五所川原市）

成田千空 資料再録 ②

【青森工業学校校友会新聞『青工』】

貯蓄標語

貯金は銃後の最前線　五年　成田　力

作文

涙　機五　力　生

涙は人情の花であり、尊い生命の源泉である。私達の自我がその故郷のいのちを忘れたとき私達から涙が涸てしまふ。罪人が泣いたとき、かれはその世知何浄められる。そしてそこには罪もなく、義もなく、たゞ闇と悲哀とが永遠の影を浮べて漂ふて居るばかりだ、そこには在任も聖徒も同じいのちの流れに浸されて、永劫の闇と悲哀とに眠つている（…）人の不幸を見て知らず知らずに落す一滴の涙は人類相愛の一台表徴であり、ひいてはあらゆる社会事業を起す一台根本となるのである。又静かに輝いてゐる月を眺め、虫の音に耳を傾くるとき回顧の情を起し、或は憧憬の涙が自ら目に浮かぶ。この涙はやがては世俗の尊い詩を生み幾多の偉大なる藝術を生み出す原因となるのである。（…）

涙!! 涙!! 真に涙のあるところにいのちがあり、力が生まれる。そしてそこに聖い世界が創造される。而し女々しい安価な偽善的の涙は日本人の涙として恥づべきである。何処迄も涙は人情の花であり、尊い命の源泉でなければならぬ。

私達は涙を知らぬ賢き人となるよりも涙を知れる愚かな人となることを欲すべきである。涙なき賢人は常にいのちの骨組みを見、悲しめる愚人の胸は常にいのちの流れといのちの温かみとを感ずることが出来るからである。

―草稿ノートより―

【高松玉麗主宰『寂光』松濤社俳誌】

成田千空の句と文章を抄出

第十八年

昭和十六年　師走

青森五句集

（郷土の初冬）第三回

八點句

豆がらのうつり火嬉れし雜魚燒く爐　千空

三點句

霜冴ゆる里は菜賣りのふれ聲に　千空

二點句

着ぶくれし子等や冬めく峽の校　千空

一點句

たまさかの日和を窪み蒲團干す　千空

甲田嶺を惜しみつ急ぐ冬構　千空

選後評　高松玉麗

豆がらのうつり火嬉れし雜魚燒く爐　千空

たまらなく親しみの湧く句　私の幼い時にはこんなことがよくあつた。

五句集採點表

累計（第三回郷土の初冬迄）

三十三點玉麗……十五點千空……

拝啓　玉麗先生には愈々御壯健の御様子悦ばしく存じます。

青森五句集は去る十七日配達になり、早速、作句、選句を致しました。

何時もの通り選句は苦心さんたんです。

○葱抜くや夕仕度らし隣家も

しつくり作者の身についた此の句からは温い作者の息が感ぜられる氣が致しました。何んともない様に詠つてゐながら、實に良く郷土の初冬を表現し得てゐる様に思ひました。

○山は雪さむき灯のもと妻籠編む

始め、此の句を讀んだ時、上、五に何んとなくぎこちないものを感じて面白くありませんでしたが、然し、よく〳〵味はつてみると、上五の大膽さこそ、此の句の生命の様に思はれ、「おう、山には雪が降つたそろ〳〵里にも雪が來るであらう」と思ひつゝ一心に寒々とした藁家の薄暗い灯のもと妻籠を編み續けてゐる作者の姿が眼に浮んで、云はれもない懐しさを覺えました　矢張り此の句も郷土の初冬を充分現し得てゐると思ひました。

○干せきれぬ違作の藁の匂ひ寒む

上、五からは、暗さ許りしか感じませんでしたが、中七、と下五を一氣に詠み上げたリズムのすばらしさと良く材料をこなしてゐる作者の手腕が目に付きました。そして此の句も郷土の初冬として捨てがたく思ひました。

○白菜積む手にキリ〳〵と霜解けぬ

單なる寫生句でせうけれども、作者が此の句にふき込んだ情熱を羨望したく思ひました。

○積薪の風の乾きや冬に入る

作者の苦心を尊く思ひました。

同じ意味で○暮れ色の風に落葉のふりつゞく。や○冬ざれの庭靜かなる陽を返す。又○炭つぎて一人見守る夕嵐○病める身に沁み入る煙落葉焚く等、各々、佳句だと思ひました。完全に作者のものになつてゐると思つて、選ばうか、どうしようか、戸まどつたものに○醫の車見慣れし南瓜乾す家に、があります。

盲滅法な選び方で、本當に、先輩の皆さんに濟まなく思つて居りますが、何卒、今後とも御教導希ひ度く存じます。

尚、私は、その後、非常に順調に快方へ向ひ、今では、一日の殆どを起きてゐ、朝夕二回の散歩を實に、氣分よく行なつてゐます故、他事乍ら御休神下さい。此の分では豫定より大分早く完治するかも知れません。

では、先生もお元氣で。　敬具

○紅葉散る障子に今朝の冬日充つ

成田千空

高松玉麗先生

昭和十六年十二月四日發行

青森縣青森市浪打六　松濤社
發行所
青森縣青森市浪打六

編輯兼發行者　高松喜久藏
青森市大野字長島三ノ二
印刷者　柴田吉五郎
青森市大野字長島三ノ二
印刷所　東奥日報社印刷部業務局
（菊判　149×188ミリ　四頁）

（以下、奥付省略）

第十九年

昭和十七年　第一號

青森五句集

（冬の天象）第四回互選

四點句

玉あられ仰ぐ兒の瞳のいと澄みぬ　千空

三點句

冬月の釋尊を射て伽藍冴ゆ　千空

（菊判　149×210ミリ　四頁
昭和十六年十二月廿八日　發行）

昭和十七年　第三號

高松玉麗選

寂光郷土

青森　成田千空

福壽草古典味はう靜かなり

屋根の雪痛快に澄み雪下す

青森五句集

第六回（冴ゆる）

三點句

もたいなし夜なべの母に灯の冴ゆる　千空

二點句

高熱の子の伸吟かなし灯の冴ゆる　千空

一點句

荷駄の鈴街の灯拔けて月に冴ゆ　千空

冴ゆる夜の讀書に母の聲ありぬ　千空

夜稽古終へし道場の冴え深む　千空

（菊判　149×188ミリ　四頁
昭和十七年三月十九日　發行）

昭和十七年　第六號

寂光集　高松玉麗選

成田千空

摘草の大夕燒に吸はれゆく
金魚さつと光亂してひるがへり
梅雨靜臥衣かきねておこたらず
いちはつのむらさきふかく梅雨に入る
すぽと拔くラムネの泡の涼しけれ
ところてん咽喉につめたく退院す
さゝやかにたけのこめしの祝しぬ

（菊判　148×210ミリ　四頁）

＊発行日付なし、回覧板欄に、「次号締切八月十五日」とあるので、六月初と推定される。

第二十年　第一號

昭和十八年　一月號

「雷魚」の句々を讀みて

成田千空

本當の事を云ひますと、私は鰰といふ魚をあまり好かないのです。（好かないといふのは勿論、味のことです）。從つて芯からの愛情が湧かない、愛情がほんものでないから、句も無理な、そして嘘つぱちな、とても救はれないものになつて仕舞ふのです。

その私が、五句集「雷魚」の句々について、とやかく云ふのは苦しい仕業ではありますが、命ぜられたまゝに、何か、ひとりごとでも呟いてみようと思ふのです。乞御寛容。

課題句の場合、私はその課題の絶對性を尊重します。それから、私はどういふ譯か生活感情と詩感が結び付いて吐き出された句に、忽ち醉はされて仕舞ふのです。而し此の事は、別に私の絶對的な見解でもありませんし、それかと云つて、私は自分を特別リアリストだとも考へてゐませんが、とにかく今のところ、唯だ好きなだけなのです。

○心ぬくもる鰰味噌の燻る香に　（流翠）

一日の仕事に疲勞しきつて歸つた作者は鰰味噌の燻る香に、どんなにか心があたゝまつた事でありませう、さあ、明日も懸命に働くぞ、といつた作者の氣概が、馥郁と匂ふ鰰味噌のかほりの中に感ぜられます。此の場合の鰰も動かないと思ひます。

それとほゞ同じ事が

○鰰燒くずぼりと沈め燗德利　（玉麟）

にも云へると思ひます、「ずぼり」は大膽な表現で、此の場合たいへん利いてゐます。生活にどつしり根を下した人でなければ到底出來ない境地、表現だと思ひます。

○火氣のりてこし雷魚のそりつるを（流翠）

此の句に接して一本して、やられたと思ひました。材料が揃つてゐても、私には作れなかつたのです。てら〳〵そつてゆく雷魚を凝視してゐる作者の瞳も輝いてゐます。「つるを」は作者の雷魚に對する愛情でありませう。

○灯の遲き炭火の色よ雷魚燒く（研二）

雪にとざされた鄕土生活の相をよく把握し得てゐると思ひます。雷魚を鰰に置きかへてみましたが、やつぱり雷魚の方が強く感じました。唯一つケチをつければ、詩魂の燃燒が「炭火の色よ」程度で消えて仕舞つた事が殘念でなりません。

○鰰曳く潮騷ソ領へつゞくなり　（玉麗）

骨に徹るやうな寒さ、夜明け方の浪は、ごう〳〵と船をうちあげ、うち落す、船は荒海の幸を懸命に曳く。ほのかにも、はろかにソ領の島山が船尾から望まれる。激浪に崩れ乍らも、船の澪は長い〳〵帶をなして、ソ領より連つてゐる。船員はおのもおのもの持ち場持ち場を決死で守つてゐる。これは、なんと美しくも尊い相であらう。私はもう感謝で一杯である。

最後に、これらの句に次ぐべきものを掲げ、私に判つきり分らなかつた句の一つ、二つ、あつた事を先生はじめ、先輩諸氏にお詫びしてペンを置きたい。

○鰰網警羅船遠く過ぎにけり　（玉麗）
○雷魚の味濃くなりて年暮るゝ　（輝良）
○初雷魚お給仕の母はいそがしき　（南峰）
○雷魚や冷めたきひそめ浪曉ける　（流翠）

松濤社句會（十二月　三浦壽綠居）

○宿題「雪　圍」

二點句　千空
雪圍洩る日綾なす疊かな
一點句　千空
雪晴の青木まばゆく圍ひけり
雪圍してうつくしく燃ゆる爐火

新年句會（一月八日　於女師校）

○宿題「双六」互選

三點句　千空
双六や終り間近き賽はずみ
二點句　千空
うちふりてつまづきまろぶ賽愛し

五句集「雷魚」互選

二點句　千空
はた〳〵の味を盡くせる寒さかな
雷魚のおほき孕みのいたましき
一點句　千空
雷魚のピンと尾そりし膳につく
雷魚の小味よ冬の玉者かも

（菊判　148×210ミリ　四頁
發行日付なし。一月初か）

第二十年　第三號

昭和十八年　六月號

勤勞報國隊員として高松玉麗先生を送る

郭公鳴くみやびの國を守らでは　成田千空

寂光集　青森　成田千空

穴出でて眞の日いぶかる地蟲かな
うつしゑもはべり參らせ雛の宴
蝌蚪散りてふとも我が影さみしかり
春泥のほとりの鍛冶火きよらなり
咲きこぞる椿やわだの板凪に
大日輪亨けて囚徒ら耕せり

（故晴秋氏妻子へ）

母子草咲かばおもほゆ嗣ぐ道を

青森五句集

「しばれ」互選發表

三點句（輝・桃・兎）　成田千空

（闘病日記）

しばれひしひしペンの先より傳ふごと
二點句
しばれ沁む障子の白さふとわびし　千空
ぬくく病む躬の有難きしばれ夜や　千空
一點句
よきしばれ祈りて豆腐さらしけり　千空

「雪切」互選發表

四點句（淨・梅・夜・輝）　成田千空
雪切りし衢洞然と寢しづまり
二點句
雪切を終へしゆとりの湯あみ哉　千空
一點句
夜はことに月の雪切かまびしく　千空
月よそに雪切るわれとなりゐたり　千空
雪切りし舗道ましろに夜雪ふる　千空

玉麗先生壯行句會　千空記

六月四日　石阿彌居

參會者　先生、石阿彌、壽綠、流翠、輝良、研二、半十郎、女師生三孃、千空

明け放つた八疊のむかふは田圃である。たまさかに來鳴く野鳥の聲も愛らしい。玉をまろばす蛙の聲が、暮るゝにつれて、野づら一つぱいにひろごり、幽寂な雰圍氣をつくる。鳴き聲は犬と猫ばかりといつた風塵の巷を歎ずる壽綠先生。可々大笑。

朗らかな半十郎氏、コツプに清楚な一枝と、さりかにを一匹泳がせて、したり顏に持つてくる。その突飛な配合に、あやふく吹き出しさうになる。いや〳〵、なか〳〵いゝ。ふと田舍を思ひ出した。

「此の花、何といふ花か知つてる？」

石阿彌先生、早速である。（知らない）
「まるめろ！」
間發を入れぬ女師生の答。（あ、さうか、これがまるめろか、分らぬものだ）ひそかに思ふ。
六時、七時、御大を待つのみとなる。石阿彌氏から席題「蛙」が出る。耳を澄ます。鳴いている、鳴いてる。眼をつむる。風の底にひそと鳴き交してゐる蛙。息をころす。幽かに若葉の戰ぎも聞える。ひたぶるに詩魂を燃やす。一句でもいゝ、立派な句を吐きたい。まことの句を吐きたい。みんな一心に作る。それが何よりも先生への激勵となることを信じつゝ
七時を大分廻った頃、先生がお出でになられた。何故かほッとする。
清書に大分手間どつて、愈々披講。石阿彌氏母堂心づくしのお壽司を有難く戴きつゝ互選に入る。みんないゝ、どれを採つていゝか迷ふ。
採點前の一と時。初對面の輝良、半十郎、千空の三者を、先生がお互ひに紹介して下さる。よろしく、半十郎、此の方はさむらひ名が好きなんだな、と思つてゐると、本名、五郎さんと明かしてくれた（あ、成る程10―2か、うまく出來てる）と感心する。
愈々採點。研二さんあたりの句が、流石にぐん〳〵點を重ねてゆく。
批評、和やかなうちにも含蓄のある鋭い評言が容赦なく飛び出る。大いに勉强になつた。
次いで先生選の席題句披講。佳句がつぎ〳〵に發表されてゆく。その間にも蛙の聲が愈々盛んになるばかりである。
最後に流翠氏から激勵句が披講される。床の間を背にした先生の肩ごしに、雄渾な筆致の達磨大師が大きな眼をして、無言の激勵を與へてゐるのが見受けられた。
（菊判　150×213ミリ　八頁
發行日付なし）

【雑誌『月刊東奥』東奥日報社】

1941年4月号

俳句（太田耳動子選）
「春の朝」
佳作　青森市　千　空
病む我れに住みよき春の朝となり

1941年6月号

俳句（太田耳動子選）
「青　嵐」
佳作　吉川　成田千空
青嵐や白鳥波に寄せられて

1941年9月号

俳句（太田耳動子選）
「盂蘭盆」
一位（賞）　青森市　成田千空
盂蘭盆を凪いで佛の海となり
評「盂蘭盆」と佛とは重複する嫌ひはあるが、「佛の海」は良い、どつしりしてゐる。諸々の佛の集まつてくるのを迎へる作者の敬虔な氣持ちがあらはれてゐる。

1941年12月号

俳句（太田耳動子選）
「師　走」
佳作　成田千空
小豆煮る師走の榾火殊によし

1942年1月号

俳句（太田耳動子選）
「初鶏」
佳作　青森　成田千空
初鶏の道を灯して詣でけり

1942年2月号

俳句（太田耳動子選）
「寒念佛」
佳作　青森　千　空
病みほけて寒念佛の鉦親し

1942年3月号

俳句（太田耳動子選）
「凧」
佳作　成田千空
切れ凧のいびつに空を流れたり
方言詩（伊豆能平選）
入選（賞）
旋風　青森市　成田　力
旋風ア
凧ごとグリさへで
海の方ッちや
逃げで行た

1942年4月号

俳句（太田耳動子選）
「野火」
佳作　千　空
遠野火を馬車に搖られてわびしみぬ
方言詩　旋風　【作曲】木　村　弦　三
旋風ア
凧ごとグリさへで
海の方ッちや
逃げで行た
（詩…本誌三月号入選・成田力作）
（楽譜　省略）
作曲のあとに
方言詩には二つの流れがある様です。一つは土地の生活を叙事的に取扱つたもの。このうちには暗い低迷した土地の雰圍氣を多分に盛られてゐますが、これは例へば高木恭造氏の詩集〝まるめろ〟一戸謙三氏詩集〝ねぷた〟の中のいろいろな詩。しかし一方には方言をもつて忘れられた自然に對する幼い思念を蘇らすことに役立たせてゐるもの。これは今までの當選詩の大方の例。（二月號の〝笹の葉コの唄〟、〝初産卵〟、三月號の〝旋風〟等）特に『唄ふ』ことを意識して作られるこの様な場合、方言ににじんで來るものはこの幼い思念であることは當然のことにも考へられます。
方言で唄ふ詞々にはかういふ童心にかへらしてくれる力もあることは不思議なことです。郷土の子供達が唄つた古い〝わらべ唄〟の數々には夕燒や、風や、雨や、また飛ぶ鳥にも、虫にも自然に向つて聲限りなく唄ふための方言の完全な魅力がありました。方言詩は一方かういう自然の姿でもあります。
木　村　弦　三

1942年5月号

俳句（太田耳動子選）
「雲雀」
佳作　千　空
走り火にするどくたちし雲雀かな
方言詩（伊豆能平選）
佳作　青森市　成田　力
晩春
本コ讀倦で
がらがド
窓開げだキャ
蛙の月夜で
あッたネ――
（以下、次号）

寄贈感謝

西谷ともえさん
①松濤社俳誌『寂光』資料
1941年(昭和16)師走／1942年 第1号・第3号・第6号／1943年 第1号・第3号。
②『月刊東奥』千空作品掲載資料

土田紫翠さん
①俳誌『渋柿園』成田千空追悼号　2008年2月号。
②『渋柿園』『渋柿園合同句集』千空句資料。

原稿を募集しています

会報『千空研究』の原稿を募集しています。これは没後十年記念『評伝 成田千空』の資料として集めているものです。

1. 調査・研究に関するもの（4000字以内）
2. 回想の成田千空（2000字以内）
3. 千空句鑑賞・感想（400字以内）

締め切り　第3号は7月末、到着順に掲載します。
＊稿料は差し上げられませんが、掲載紙をお送りします。

送り先　（下段発行所、青森文芸出版あて）
＊Eメールで送信くださる場合
sasaki@a-bungei.co.jp

会調査研究員に齋藤美穂さんを委嘱

千空研究会の調査研究員に、五所川原市在住の齋藤美穂さんを委嘱しました。ボランティアとして調査研究にご協力いただきます。

神奈川県出身、國學院大學文学部卒。3月まで青森県近代文学館解説員。

千空句集・歳時記　会員特価

『地霊』第1句集　**1800円**＋税
『人日』俳人協会賞受賞　**1500円**＋税
『天門』第3句集　**1500円**＋税
『白光』蛇笏賞受賞　**1800円**＋税
『千空歳時記』矢本大雪編　**3000円**＋税
（右の4冊と『忘年』を収録。『十方吟』は含まず）

＊千空研究会員に限り5冊セットを**5000円**（税・送料とも）で販売します。
1冊ごとの場合は、各2割引とします。
＊千空研究会会員と告げてお申し込みください。

青森文芸出版（☎0173-35-5323）

会員名簿

〈青森市〉佐々木とみ子、西谷ともえ、野沢省悟、吉田州花
〈平内町〉佐藤陽子
〈弘前市〉石崎志亥、泉風信子、市田由紀子、鎌田義正、佐藤隆、舘田勝弘、土田紫翠、三上弘之
〈藤崎町〉清水雪江
〈八戸市〉上條勝芳、小林凡石、藤田健次
〈十和田市〉米田省三
〈五所川原市〉葛西幸子、木津谷絹子、櫛引麗子、齋藤美穂、櫻庭利弘、佐々木あさ子、佐々木達司、高橋睦子、奈良知治、浜田和幸、松宮梗子、山内ひろ子
〈板柳町〉木村武彦
〈深浦町〉山本こう女

会員を募集しています

会報『千空研究』継続配布をご希望の方は、会員としてご登録ください。会費は年1000円です。

☆北極星☆

○千空さんは昭和14年青森工業学校を卒業し、東京の軍需工場に就職するが、肺結核を患い帰郷した。自宅療養のかたわら俳句を始め、方言詩に熱中する。
○昭和20年7月27日夜、青森市はB29爆撃機による空襲に遭い焦土と化した。『地霊』から2句。

炎帝よのけぞりにこの焦げ死体
焼尽の町に盆来て山青し

○食糧難のため、母の郷里飯詰村で農業に従事する。

大粒の雨降る青田母のくに
除草中雨が降り、作為のないまま生まれた一句。その後の句にも農を詠んだものが多い。千空さんは農民俳人だったと思う。戦後70年、戦争の時代を考えてみた。
○千空研究会は予想外の反響があった。それだけ千空さんに関心を持っている人が多いということだろう。資料を集め、俳句データベースと年譜作りをしている。調べてみると、千空さんの世界は奥が深く、資料も多い。新しい発見がある毎日である。
○まだまだ前途は長い。『評伝』刊行のため、みなさんのご協力をお願いしたい。

2015年5月15日発行
会報『千空研究』第2号　非売品（会員配布）
発行　俳人 成田千空研究会
佐々木　達　司
〒037-0004
五所川原市唐笠柳藤巻467
青森文芸出版内
TEL　0173-35-5323
FAX　0173-35-8414